

日本語アクセントの考察 —音声教育の必要性より—

崔 光 祐

日語日文學科

(1982. 6.30 접수)

〈要 約〉

本研究は、日本語におけるアクセント(聲調)が音聲學的な側面でもコミュニケーションに及ぼす影響を究明しアクセントの基本性格およびその規則性を提示した。論理に従って日本語教育におけるアクセントの專人の必要性とその方法論についても言及した。

日本語 억센트 考察 —音声教育의 必要性에서—

崔 光 祐

日語日文學科

(1982. 6.30 접수)

〈요 약〉

본 연구는, 일본어에 있어 억센트(聲調)가 음성학적 측면에서 커뮤니케이션에 미치는 영향을 구명하고, 억센트의 기본성격 및 그 규칙성을 제시했다. 논리에 따라 일본어 교육에 있어서 억센트의 도입 필요성과 그 방법론에 대해서도 언급했다.

I. 概 観

一般的にアクセントは、個個について社会的慣習として決まっている相対的 高低または強弱の 配置といわれる。日本語のアクセントは音の 高低によるアクセントで、単語または文節に關して社会的に定まらっていて、個人の自由意志によって變えることのできないものである。アクセントは、言語の音的側面として、廣義には音韻の一部と認められ、従って、その分析・記述に際しては、音聲學的立場と音韻論的立場の 両面がある。

日本語の高低の差は、やはり韓國の方言のように弁別的である。日本語ではこのような弁別を声調、語調、アクセントという用語を使っている。このように語の意味を分化する弁別的機能を持つゆえ、音聲

教育の面で必ず取り扱うべきだと思う。いくら綴字の發音が正確であっても、アクセントがちがえばことはがまずくなり、外國人だとばれてしまう。それに対して、發音は少しちがってもアクセントが正しければより外國語らしい外國語になり、意味もはやく通じる場合がよくある。

日本語のアクセントと言っても、地方によって多様な體系が存在しており、中でも東京方言を中心とする東京式アクセントと、京都・大阪方言を中心とする京阪式アクセントの二つに大別することができる。日本において全国的に見ると、東京式アクセントがいちばん広い範囲を占めており、現在共通語が東京語を中心に出来ているから、これからも學校教育やマスコミなどによってだんだん広まって行くことが豫想される。日本語アクセント辭典やアクセント教本などのような類の書籍内容は、みな東京式ア

クセントを扱ったものであり、ラジオやテレビなどのアナウンサーが模範とすべきだとされているものも東京式アクセントである。

東京式アクセントが持っている特性を見てみると、東京式アクセントは、二段組織で高と低の二種類がある。言語によっては高・中・低の三段あるいは四段組織になっているものもあるが、日本語の調素は高低の二種類しかない。音素が集まって語形をなし、調素が集まって語調すなわち、アクセントを成している。東京式アクセントは高から低へ移る部分が音韻論的に重要な意義を持つ。それは、東京式アクセントにおける下がり目は一語のうちに一方所しかないという原則があるからである。その下がり目を「アクセントの瀧」、その直前の音節をアクセント核という。「カラス(鳥)の場合は「ka」にアクセント核があり、その直後に下がり目があるといわれる。

東京語で、「鳥」は「ト」を低く、「リ」を高く、次に助詞の「が」などがくれば高く平らに続けて発音する。だから「トリ(カ)」の線のある部分は高く、線のない部分は低く発音するわけである。「牛、柿、口、端、水、鈴、風、塵、鼻」や、三音節語の「桜、魚」四音節語の「友だち、大學」などのグループがこのように発音されるが、これらの型を「平板型」(数字では①)と呼んでいる。ところが、「花」は「ハ」は低く、「ナ」を高く発音するところまでは同じであるが、「ハナ(カ)」のように助詞の「ガ」が低く発音される。「ナ」の部分は「一」と同じく高く発音する部分であるが、次が低いことをあらわす。「色、山、足、犬、川、旗、紙」や、三音節語の「男、女」、四音節語の「妹、弟」などもこのグループで、起伏式のうち「尾高型」と呼んでいる。(数字では、二音節語は②、三音節語は③…)次に、「心」は三音節目の「コ」だけを、「湖」は「ズ」と「ウ」を高く、その外は低く発音するグループで「中高型」と呼ばれる。(数字では、高から低へさがる音節をあらわす。たとえば、「心」は②、「湖」は③である)最後に「頭高型」と呼ばれるグループがあるが、これは、はじめの第一音節だけを高く、二音節めから低く発音する。(数字では、④である)

これから、この東京語を中心とした共通語のアクセントを中心に、その役割と規則性を究明してみたいと思う。「日本語アクセント」という用語はみな共通語のアクセントを指すことを断わっておきたい。

II. 日本語アクセントの音韻論的機能

日本語アクセントは、中国語と同じく高低が音韻論的価値を持ち、強弱は音韻論的価値を持たない。「āme(雨)」と「ame(飴)」はアクセントの配置によって意味が異なる。「ame(雨)」と「ami(網)」は第二音節の母音音素の差で意味が區別される。そして「kami(神)」と「nami(波)」は頭音の子音音素の差で意味が區別される。それで、アクセントの役割がまるで音素の役割と同じであるから、子音・母音音素を分節音素と言うのと平行してアクセントを非(超)分節音素と言う。

日本語のアクセントは、外観に感じられる語感それだけに意味があるのではなく、英語におけるアクセントの役割ほどは果していないが、次のような音韻論的機能を持っているためよりいっそう強説される。

1. 単語の意味を識別する機能

日本語には同音異義語が多く、その場合、単語のアクセントが異なれば、語の「意味のちがいを」區別するのに便利だということが一つの特徴である。「ツル」(鶴)と「ツル」(弦)、「カメ」(亀)と「カメ」(筈)、「カキ」(牡蠣)と「カキ」(柿)、「ヒニアタレ」(日)と「ヒニアタレ」(火)等等、前後関係がなくても聞きわけることができる。

- (例) $\overline{\text{ア}}$ メがすきです。(馬)
 $\overline{\text{ア}}$ メがすきです。(飴)
 $\overline{\text{イ}}$ シがかたい。(石)
 $\overline{\text{イ}}$ シがかたい。(意見)
 $\overline{\text{イ}}$ ケンをいう。(意見)
 $\overline{\text{イ}}$ ケンをいう。(異見)
 $\overline{\text{イ}}$ ツカにきますか。(五日)
 $\overline{\text{イ}}$ ツカにきますか。(何時か)
 $\overline{\text{ハ}}$ ナからでる。(鼻)
 $\overline{\text{ハ}}$ ナからでる。(花)
 $\overline{\text{ハ}}$ ナからでる。(端)
 $\overline{\text{ア}}$ キがある。(空き)
 $\overline{\text{ア}}$ キがある。(飽き)
 $\overline{\text{ア}}$ キがある。(秋)
 $\overline{\text{ヨ}}$ ンてください。(讀)
 $\overline{\text{ヨ}}$ ンてください。(呼)
 $\overline{\text{ク}}$ ロウございませう。(暗)
 $\overline{\text{ク}}$ ロウございませう。(黒)

2. 単語または文節の段落をあらわす機能

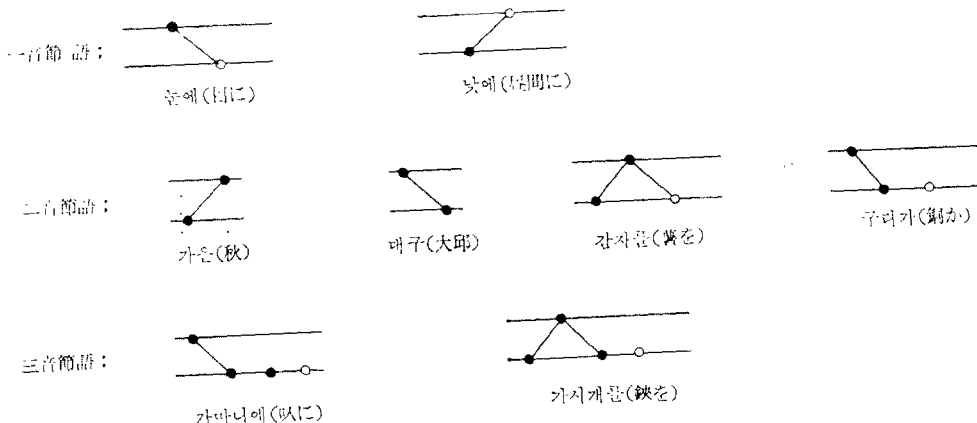
もう一つ、アクセントには、語と語の切れめを示す働きがある。東京語アクセントは、高く発音される部分は一語のうち一カ所にかたまっているから、一語のうちに高い箇所が二カ所以上あらわれることは原則として存在しない。これは「この語が一語であるとか、二語であるとかいうことを示す」ものである。また語の第一音節と第二音節は高さが必ず異なるという原則がある。それは「ここが語のはじまりだ」ということをあらわす。スモモモモモモモウチのよりに語と語の切れめに間をおかなくてもアクセントで語の切れめがわかるはずである。

- (例) $\left(\begin{array}{l} \text{イイワテ} \text{ (言い訳)} \\ \text{ナイワテ} \text{ (良い訳)} \end{array} \right) \left(\begin{array}{l} \text{ヒロイモフ} \text{ (拾い物)} \\ \text{ヒロイモフ} \text{ (広い物)} \end{array} \right)$
 $\left(\begin{array}{l} \text{クサイキレ} \text{ だ。 (臭い切れだ)} \\ \text{クサイキレ} \text{ だ。 (草いきれだ)} \end{array} \right)$
 $\left(\begin{array}{l} \text{ルスバン} \text{ にこい。 (留守番にこい)} \\ \text{ルスバン} \text{ にこい。 (留守晩にこい)} \end{array} \right)$
 $\left(\begin{array}{l} \text{ニワニワニワ} \text{ 下りガいる。} \\ \text{庭には鶉がいる} \\ \text{ニワニワニワ} \text{ 三ワトリがいる。} \\ \text{庭にはニ羽鳥がいる} \end{array} \right)$

3. 単語の品詞を異にする機能

同じ綴字の単語がアクセントの違いによって意味が異なるにとどまらず、その単語の品詞を異にする機能までも持っている。

- (例) 一杯 $\left(\begin{array}{l} \text{イッパイ} \text{ (名)} \\ \text{イッパイ} \text{ (副)} \end{array} \right)$
 今日 $\left(\begin{array}{l} \text{コニチワ} \text{ (名+助)} \\ \text{コニチワ} \text{ (感)} \end{array} \right)$



- 尤も $\left(\begin{array}{l} \text{モッ} \text{ (名)} \\ \text{モッ} \text{ (接)} \end{array} \right) \text{ 全體 } \left(\begin{array}{l} \text{ゼンタイ} \text{ (名)} \\ \text{ゼンタイ} \text{ (副)} \end{array} \right)$
 一番 $\left(\begin{array}{l} \text{イチバン} \text{ (名)} \\ \text{イチバン} \text{ (副)} \end{array} \right) \text{ 中中 } \left(\begin{array}{l} \text{ナナナ} \text{ (副)} \\ \text{ナナ} \text{ (感)} \end{array} \right)$

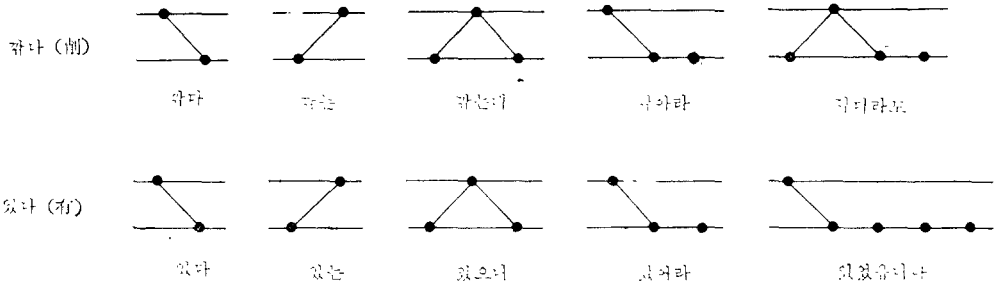
III. 日本語アクセントの発音

以上のようなアクセントを外国人が発音しようとする時、まず日本語アクセントの発音方法を身につけておかねばならない。前に述べたとおり、日本語のアクセントは高低アクセントであるから、まず発音の高低感覚を習得するのが大切である。えてして英語の強弱アクセントのように発音しがちであり、あるいは自國語にアクセントがなかったら、それにひかれてアクセント無しに発音したり、あるいは自分なりにアクセントを付けてむやみに発音したりしてしまうおそれがある。

音の高低感覚を習得するには、音楽の五線譜を利用するなどいろいろの方法があるが、韓国人の場合は、韓国語の中で高低の声調が残っている慶尚道方言の場合と比較して考えればよいと思う。(普通、韓国語の標準語には声調がないといわれている。)慶尚道方言もやはり高低二段の調素からできているので学習者に役立つと思う。その中でも大邱を中心とした方言のアクセントを例に取って見ると次のようである。

1. 名詞の場合

2. 活用する用言の場合



これを繰り返して練習し、そしてその 高低感覚を日本語に應用すればよいと思う。

Ⅶ. 日本語アクセントの規則性

東京語アクセントは、比較的はっきりしていて、ある一つの単語について東京人はみな同じアクセントで発音し、新しい単語が出来ても自然に同じように発音できるよう頭の中にある法則が立っている。外国人としてはこの法則にできるだけ近付こうとする努力の初歩がこれからの試みである。

こうしたアクセントの法則は、名詞・動詞・形容詞などの品詞によっても異なり、それがまた他の品詞からできた轉成語であるとか、複合のしかたによっても異なる。また二音節語か三音節語かの音節数によっても法則が違っており、さらに和語と漢語とそして外來語によってもグループが分けられる。それゆえ、法則の数は頗る複雑であるが、幸いに共通語のアクセントの法則はほかのものに比べて比較的規則的な體系を持っている。そこで単語の基本的なアクセントとアクセント法則さえよく覚えておけば、あとはどんどんそれぞれのアクセントの型を類推していけるものである。その方がひとつひとつの単語のアクセントを丸暗記するよりずっと効果的であると思う。

とはいえ、ここですべての法則を全部挙げることは不可能であろう。だから、まず獨立した単語自體にどのようなアクセント法則の傾向があるかを調査し、それからアクセント法則のごく初段階であると思われる複合語(あるいは合成語)のアクセント移動規則とその公式を立てることにする。

1. 獨立した単語自體のアクセント法則

極端的に言うると、獨立単語ひとつひとつのアクセントは、そのままアクセント辭典に確める方法しかないと言っても過言ではない。しかしそうしたらあまりにもややこしい。できれば最小限の傾向でも摸索して、そこから接近するのが能率的であろう。

動詞、形容詞の場合は基本アクセントの数が少く、それは活用の時もだいたいその性格が堅持されるもので、活用によった基本公式だけ覚えれば比較的使いにたやすいのである。しかし、名詞の場合は単語によってさまざまで、はっきりとした特色は見えない。以下、各獨立した単語のアクセント傾向を品詞別に調べてみたいと思う。

(1) 名詞

辭書「新明解國語辭典」(三省堂)に示されている重要語を對象に音節別に調査して見ると次のようである。

一音節語：① 29 ② 20

二音節語：① 291 ② 188 ③ 151

三音節語：① 451 ② 76 ③ 109 ④ 710

四音節語：① 178 ② 86 ③ 92 ④ 42 ⑤ 1220

これを見てみると、これといった特徴はない。しかしそれなりに三音節語と四音節語の中で①と⑤が相當な部分を占めている。このような傾向は新しく出来る語とか、固有名詞などを發音する時に強く影響を及ぼしてるから注目していただきたい。漢語熟語を對象に調査してみると、大体「級、病、狀、場、性、體、覺、等、堂、版、役、連」などが後に付くと平板化する傾向があり、「以、各、貴、現、故、今、諸、先、前、尊、當、同、某、本、明、兩」などが連体的

につくものは頭高化になりやすい。そして疑問を表わすことばはほとんどが頭高型になる。例えば、指示代名詞の不定稱である「どれ」「なに」「どちら」「どこ」「どっち」、人稱代名詞の不定稱である「だれ」「どなた」「どのかた」「どのひと」、疑問名詞「いつ」、疑問副詞「どう」「どうして」「どんなに」「どのぐらい」「なぜ」「なんで」、「何」が不定の数を表す接頭語「なんにん」「なんにち」「なんぼん」など、そして疑問詞が重なったもの「だれだれ」「どこどこ」「いついつ」「なににな」「だれそれ」「どこそこ」などはみな頭高型である。

(2) 形容動詞

漢語からできた形容動詞はたいいてい名詞に準じる。和語からできたものには次のような規則が見える。

1) 語幹が三音節であるものうち「○○か」型のもは頭高型に発音される。

例) かゝすか(微か)、静か、確か、俄か、閑か、遙か、豊か。

2) 語幹が四音節であるものうち「○○○か」型のもは中高型(アクセント記號で②)である。

例) あきらかに(明らか)、鮮か、厳か、穏やか、細やか、爽やか、しなやか、和やか、滑らか、賑やか、華やか、朗らか、緩やか、など。

(3) 動詞

動詞は名詞ほど複雑ではない。例えば、二音節語は①か◎、三音節語は②か◎、四音節語は③か◎、のように各音節語に二つしか存在しない。規則としては次のようなものがある。

バ行の五段動詞には平板型が多い。

例) 飛ぶ、呼ぶ、遊ぶ、浮ぶ、並ぶ、學ぶ。

タ行の五段動詞には頭高型(二音節語の場合)と中高型が多い。

例) 打つ、勝つ、立つ、待つ、育つ、放つ、分つ、持つ。

上一段動詞には中高型が多い。

例) 起きる、落ちる、悔いる、徴りる、強いる、過ぎる、など。

そしてある動詞の派生語と認められる語はその動詞と同じ式に属する。例えば語根が同じでありながら語末を異にして他動詞の對をなす動詞はともに起伏式か平板式かの両方のいずれである。

起伏式	飽く ①	(生きる②)
	飽かす②	(生かす②)
	破れる③	(茹だる②)
	破る ②	(茹でる②)

平板式	及ぶ ◎	(漏れる◎)
	及ばす◎	(漏らす◎)
	似る ◎	(甘える ◎)
	似せる◎	(甘やかす◎)

三音節のうち、例外として起伏式の頭高型がある。例えば、かゝえる(帰)、かゝえす(帰)、とゝおる(通)、とゝおす(通)、まゝいる(参)、まゝいる(入)、もゝうす(申)、などである。

(4) 形容詞

動詞のごとく各音節語に二種類しか存在しない。規則は二音節語はみな起伏式の頭高型しかないというほどである。

(5) 副詞

漢字からのものにはほとんど規則性が見つからないが、和語にはたいいてい次のような規則を立てることができる。

1) 二音節語を繰り返した擬声・擬態語は頭高型であり、形が変わるにつれて次のようにアクセントが変化する。

きらきら きらーっと きらりーと きらきらだ
ころころ ころーっと ころりーと ころころだ
ちらちら ちらーっと ちらりーと ちらちらだ

これらの第一音節が無声化するとびかびか、ふさふさ、ふてふくのごとく第二音節めが高くなる。

2) 二音節を繰り返したのもでもそれが普通の言葉からできたものなら平板型が多い。

おりおり、たびたび、たまたま、だんだん、ときどき。

例外) まいだまだ、まいなよな(夜夜)

3) 三音節語のうち、終れりが「と」で、その前に促音か撥音かあるいは重母音のあるものは平板型になる。

そっと、じっと、ずっと、ほんと、たんと、
ちゃんど、ぼんど、ついと、ひょいと、ふいと、
など。

4) 四音節語のうち、終わりが「り」で、第二音節めが促音または撥音のものは中高型③になる。

あっさり、うっとり、がっかり、たっぶり、
うっかり、うんざり、のんびり、ぼんやり、
など。

四音節語にはまた「ば」っばど「せ」っせと「さ」っさと」というものがあるがその例は少ない。

2. 複合語(或は合成語)のアクセント規則

独立した単語の固有アクセントは、いつもそれを堅持することだけでなく、他の単語とか接辭などと結合する時、ある一定の公式に従って移動する。これは日本語アクセントの大きな特徴の一つと言える。例えば、名詞(N)に接頭語類(P)と接尾語類(S)そして同等の名詞(N)が付いた場合、そして名詞(N)と動詞(V)、動詞(V)と動詞(V)、名詞(N)に形容詞化接尾語(AS)、そして各品詞(M)に特定の接辭(A)が付いた時に一定の規則によって移動する。

(1) P-N

後の名詞のアクセントに関係なく前の接頭語類によって全体のアクセントが決定される。

1) 否定の意を表わす「不、無、未、非」が付くと全体が中高型②となる。

「不」不道德(ふど¹うとく) 不美人(ふび¹じん)
不體裁(ふて¹いさい) 不正確(ふせ¹いかく)
「無」無意識(むい¹しき) 無風流(ふふ¹うりゅう)
無批判(むび¹はん) 無条件(むじ¹ょうけん)
「未」未青年(みせ¹いねん) 未開発(みか¹いはつ)
未開拓(みか¹いたく) 未発表(みば¹っぴょう)
「非」非衛生(ひえ¹いせい) 非常識(ひじ¹ょうしき)
非公開(ひこ¹うかい) 非常勤(ひじ¹ょうきん)

例外としては、「不自由」「無邪氣」は頭高型、「無着陸」「無試験」は中高型③などである。

しかし、前後の関係が複合語とか、前のものが接頭語としての意識がなくなって一つの語として固まってしまったものは平板型になる。「不時着、不死鳥、不如帰、不夜番、不思議」など。

2) 尊敬・美化などの役割をする接頭語「お(御)」は、後の名詞が中高型であるものを除いては全体が平板型あるいは中高型②の両方のいずれである。

平板型になるもの：一音節の名詞に付いた場合と、動詞からの轉成名詞、そして名詞が平板型・尾高型であるものなど。

例) おち¹ゃ(お茶)、おゆ¹(お湯)、おつり¹(お釣)、
おむかえ¹(お迎え)、おさげ¹(お酒)、およめ¹
(お嫁)、おこめ¹(お米)。

例外) おかわり(お代れり)、おきまり(お決まり)
中高型になるもの：もとのアクセントが頭高型であるきの。

例) おさんじ(お三時)、おつゆ¹(お汁)

おはし(お箸)、おこづがい(お小遣い)

例外) おいくつ(お幾つ)、おふね(お船)

後の名詞が中高型のものはそれを生かして発音する。

例) しげ¹ん(試験)→おしげ¹ん

「おん(御)」の付いたものは全体が頭高型になる。

例) 「お¹んち(おんち)」、「お¹んまえ(おん前)」、
「お¹んて(おん手)」。

3) 「ご(御)」はたいてい漢語に付くが、これにも平板型と中高型②の二種類がある。

平板型：ごきげん(御機嫌)、御馳走、御破算、御不承。

中高型：ごい¹っしん(御一新)、御苦勞、御新造、御面相。

4) 「おお(大)」が付くと全体が中高型③になる。

おおあ¹たり(大当たり)、おおあ¹め(大雨)、おおう¹りたし(大売出)、おおさ¹わぎ(大騒ぎ)。

(2) N+S

P+Nのように後に付いた接尾語が全体のアクセントを決める。ここには前の名詞の最後の音節まで高いものと、全体が平板型になるものと二種類がある。但し、前の名詞が二音節以下のもは必ずしもこの規則に従うものではない。

1) 名詞の最後の音節まで高いもの。

後部一音節語：下、記、期、器、機、區、湖、士、氏、誌、市、部、車、社、者、手、費、夫、婦、部、など。

例) ちよだ¹く(千代田区)、べんご¹し(弁護士)

ぶんか¹ぶ(文化部)、うんで¹んしゅ(運転手)

後部二音節語：員、院、駅、園、会、界、海、街、學、館、局、郡、県、券、山、式、室、宗、省、城、心、人、店、門、料、力、灣。

例) かんこくじん(韓国人)、かいぎ¹しつ(会議室)

きょうじゆ¹かい(教授会)、

えいが¹かん(映画館)

2) 全体が平板型になるもの。

後部一音節語：科、家、課、語、座、派。

例) ひしょ¹か(秘書科)、しゅうきょうか(宗教家)

がいてくご(外國語)、いんしょうは(印象派)

後部二音節語：鏡、教、場、性、制、製、線、隊、亭、展、中、代、刀、党、燈、版、盤、表、病、米、用、流。

例) にほんせい(日本製)、べんきょうちゅう(勉強中)、キリストきょう(一教)、

うんどうじょう(運動場)

和語の中で「いろ(色)、かた(方)、かた(型)、かわ(側)、くみ(組)、てら(寺)、ゆき(行き)、やま(山)」など。

例) コーヒーいろ(コーヒー色)、 ななじゅうねんがた(70年型)、きょうとゆき(京都行き)、あすかでら(飛鳥寺)。

3) 次のものは上の1) 2)のいずれにも発音される。油、所、炎、計、罪、般、戦、文、法、艦、など。

例) きはつゆ、きはつゆ(揮発油)
ろくまくえん、ろくまくえん(助膜炎)

4) 後部が和語で頭高型の二音節語はそれを生かして発音する。

汗、雨、空、窓、麦、船、傘、数、前、など。

例) れたしふね(渡し船)、にわかあめ(俄雨)
あいあいがさ(相合傘)、あさめしまえ(朝飯前)

(3) N+N

合成語のうち後部が二音節またはそれ以上の名詞からなるものの中で、後部が平板型、尾高型、頭高型の場合は、原則として後部の第一音節まで高い型になり、後部が中高型の語は原則として後部のもとの高さの切れめまで高い型になる。

後部平板型

あまがえる

やまざくら

えどじだい

後部頭高型

きみどり

なつすがた

レモンジュース

後部尾高型

いしあたま

なつやすみ

じゅけんじごく

後部中高型

やまつしじ

にゅうがくしげん

やすサラリーマン

以上のように合成名詞(N+N)の中に後部の第一音節まで高い型になるものはこれ以外非常に多い。次のような語が後部になると全部がこの規則に従う。

…相手、…会社、…仕掛、…見舞、…学校、

…機関、…競争、…公園、…細工、…次第、

…住居、…同士、…年生、…売場、…記事、

…協会、…銀行、…時代、…思想、…主義、

…神社、…新聞、…地方、…道具、…大学、

…時計、…都市、…運動、…行列、…料理、

などたくさんある。

動詞の連用形 + 動詞の連用形から出来た転成複合名詞は平板式になる。

うりだし(売り出し)、 かいあげ(買い上げ)聞き違い、食べ過ぎ、仕上げ、死に別れ、似合い、乗り換え、見合い、取り扱いなど。

(4) V+V

前部の動詞によってアクセントが左右される。前部が平板式であれば全体が中高型になり、起伏式であれば平板型になる。

前部が平板式：きこむ(着込む)、きおわる(着終わる)、かいあげる(買い上げる)、かいなおす(買い直す)、なきだす(泣き出す)、なきやむ(泣き止む)。

前部が起伏式：かきだす(書き出す)、かきこむ(書き込む)、みこむ(見込む)、みおわる(見終わる)、よみあげる(読み上げる)、よみなおす(読み直す)。

(5) N+V

全体が中高型になる。

きづく(氣付く)、かさばる(嵩張る)、きずつける(傷付ける)、やくだつ(役立つ)、いきまく(息巻く)、こころみる(試みる)。

「する」複合動詞は、一音節の名詞に付くと中高型になり、名詞が二音節語の場合は、二音節めに促音であるものは平板型その外は中高型になる。

きずる(期する)、しずる(死する)、じゅくずる(熟する)、あつする(庄する)、たつする(達する)、あいずる(愛する)、かんずる(関する)、やくずる(訳する)、きゅうずる(窮する)。

(6) N+AS

名詞に形容詞化接尾語がつくと、全体が最後から二番めの音節まで高い中高型になる。

まるっこい(丸っこい)、いなかくさい(田舎臭い)
おとこらしい(男らしい)、ふるめかしい(古めかしい)、うしろめたい(後めたい)、さしずがましい(指図がましい)、みれんたらしい(未練たらしい)

(7) M+A

普通、接辭には獨立したアクセントがなく、前の名詞、動詞、形容詞などのアクセントに属するが、次の接辭は前部のアクセントの性格に左右されないで、獨立的なアクセントの性格を持って全体に拘束力を持つ。

…ざらい、…だらけ、ずつつ、…べき、…ます、…らしい、…う、…だげ、…ごと。

ねこざらい、うしだらけ、ひとつずつつ、おとこらしい、たべるらしい、よいらしい、かけま

う、よ^ろう、のむ^べき、か^いま^す、く^つだ^け、
き^るだ^け、き^るご^と。

V. 文節のアクセント規則

独立した単語のアクセントはいつもそのまま発音されることなく、時として文脈によって変化する。それは二つの文節がいっしょに用いられ、結合度の高い場であるとの文節のアクセントが変化を起こす現象である。このように文節が連合した時、後の部分のアクセント核が消えてしまうことを「準アクセント」とも言う。この変化はきわめて規則的で、次の三つの場合にまとめることができる。

1. 前の文節のアクセントが起伏式①②③…の場合には全体のアクセントがそのまま①②③…である。

(1) 後の文節が名詞類(よく他の語の次に来るもの)

例) 「うえ」

う^つく^しい^うえ^に → う^つく^しい^うえ^に

「とき」

ち^いさ^いと^きか^ら → ち^いさ^いと^きか^う

「こと」

な^んの^こと^で → な^んの^こと^で

「やつ」

に^いや^つだ^に → に^いや^つだ^に

外に「ほう、とおり、ころ、など、ぶん、あんばい」などがある。

(2) 後の文節が動詞類

例) 「…がある」

は^さみ^があ^る → は^さみ^があ^る。

「…てくる」

で^てく^る → で^てく^る。

「…なる」

ほ^しく^なる → ほ^しく^なる。

「…てください」

か^いて^くだ^さい → か^いて^くだ^さい。

2. 前の文節のアクセントが平板型の場合は、全体のアクセントは、前の文節の音節数+あとに来る文節の①②③…の番號である。

例) う^しが^いま^す → う^しが^いま^す。

や^けど^を し^まし^た → や^けど^を し^まし^た。

ご^らん^なさ^い → ご^らん^なさ^い。

ご^めん^くだ^さい。 → ご^めん^くだ^さい。

ほ^しの^うえ^いを → ほ^しの^うえ^いを。

この傾向がさらに一步進むと、連語中の名詞のアクセントの型を異にするようになる。例えば、「そのとき」「こんなとき」などが「そのとき」「こんなとき」となり、「すること」「そんなこと」が「すること」「そんなこと」となる。

3. 前後とも平板型である場合、全体が平板型になる。

例) だ^んご^を も^っら^て → だ^んご^を も^っら^て。

あ^かい^きもの^を → あ^かい^きもの^を。

あ^かい^きもの^を き^て い^ます。

→ あ^かい^きもの^を き^て い^ます。

VI. 結 語

日本語においてアクセントの特徴とか役割からみると、大切なことはまず「基本的アクセントを覚えること」「アクセントの規則を覚えること」である。日本語のアクセントの性格を教師自身も学習者もしっかりと理解し、もう一步進んで覚えることが望まれる。特に学習者の母国語などによる影響が生じないように、初級で正しい習慣付けが必要である。正しく言い分け、聞き取りができないとコミュニケーションにも支障を来す。いつも教師自身のアクセントについて反省し、常に日本人のアクセントに注意を払いながら疑問があればアクセント辞典で確かめたり、同僚同志にチェックし合ったりする心構えが望ましいと思う。

では、このようなアクセントを日本語教育の段階でどのように導入するかが問題であろう。初期のうちからアクセントについて長つたらしく説明するとか、アクセントの位置をうるさくいうのは、むしろ百害あって一利ないであろう、アクセント教育は次のように行なうべきだと思う。

1. 初級では教師がアクセントを正確に発音し、それを学生によく聞かせ、そのまま繰り返して言うようにする。

2. 上級になるにつれて徐々に学生らがアクセントについて関心を持ち始めるようになると、すこしずつアクセントの基本知識を説明しながら諸規則を必要によって提示する。

3. 日本語学についてある程度知識が積み重なると言語学とか音声学などで深く取り扱う。

以上、日本語アクセントの性格と特徴およびその

規則性について論じてみたが、これ以外にまた外国人がより速く、たやすく身に付けることができるようもっと詳しい規則付けが要望される。

参 考 文 献

1. 国語学会、「国語学辞典」、東京、堂出版、1980。
2. 日本放送協会、「日本語発音アクセント辞典」、日本放送出版協会、1981。
3. 三省堂、「明解日本語アクセント辞典」、三省堂編修所、1980。
4. 金田一春彦、「日本語音韻の研究」、東京堂出版、1979。
5. 秋永一枝、「日本語の発音」、講座日本語教育第一分冊、早稲田大学語学教育研究所、1776. 3。
6. 文化庁、「音声と音声教育」、大蔵省印刷局、1979。
7. 三省堂、「新明解国語辞典第二版」、1975。
8. 島田勇雄外、「国語概説」、桜楓社、1982。